
溪流の蒼き……くまさん

虎馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涸流の蒼き……くまさん

【Nコード】

N8355X

【作者名】

虎馬

【あらすじ】

【MHP3二次創作です】

カミサマの書類ミスで急死しました。

ふざけんな。

しかも、そのミスの隠ぺいに巻き込まれ、記憶を持ったまま転生すること。

まじで、ふざけんな。

それを承諾してしまった私。べ、別にモンハンの世界に行きたかったとか、そういうんじゃないくて……。は？え、人間には転生させれ

ないって、何それ。ちょ、ちよつと!?

チート性能なモンスターに転生した女の子のお話し

このお話は、グロい表現を含んだりしています

が、戦闘シーンには期待しないでください。

このお話は、逆ハーレム(?)とアイルーハーレム要素を含んだりする予定です

苦手な方は、お気を付けください。

いち：終始ぼっちでした。

朝ご飯は川で捕った金色に輝く魚。

昼ご飯はハチの巣から滴り落ちるのを下に敷いた大きな葉っぱで受けた、とろとろの蜂蜜。

夜ご飯はジンさんからわけてもらったお肉にお塩を振って、ちょっとあぶったものに、薬草を添えて。

にぎやかな仲間たちに囲まれて、日々を過ごす。

ああ、「ぼっち」じゃないって素晴らしい！

人間じゃ、なくなっちゃったけど。

* * *

生前、私は、なんというか、「ぼっち」だった。

小中高と休み時間は教室の自分の席ですごし、大学生になっても一緒に講義を受けたり、お昼を食べたりする人はゼロ。両親は忙しい人たちで、休日が週の真ん中の日中あるような人たちだったのでほとんど話した記憶がない。勿論、休日に一緒に出掛ける相手なんて、いなかった。

授業以外の空いた時間や休日のお友達は、本、ネット、それと、携帯ゲーム機だった。

高校までは主に任。堂の機種を代々使っていたが、大学入学を機に、S O . Y の P . O . P を買ってみた。そして、若者に大人気、というモンハンの 3 r d のソフトも買ってみたのだ。これをしていれば、誰かが気付いて声をかけてくれるかもしれない、という希望を持って。

結果、アニメ同好会や漫画研究会など、そういう、ゲームにはまる人の多そうなサークルにも入ってみたのだが、なぜか、新歓の飲み会においても、私は自己紹介の時以外話しかけられることがなかった。「名前は、。。。です。趣味は読書とゲームです。ポ。モンは最新まで、全作プレイしています。最近、モンハンのポーダブルサードを始めました！よろしくお願いします」という自己紹介の何が悪かったというのだろう。他の皆だって同じようなものだったのに。

そして、私は「ぼっち」のまま、暇なときはモンハンをやっていた。自分でキャラクターの動きを操作して、しかも敵から逃げつつ攻撃なんて高度な操作技術の必要なゲームは初めてだったので、それも、操作ボタンの種類と配置になれないハードでやっていたので、始めて三か月以上はアオアシラにすら勝てない状況が続いていた。しかし、人間、いつかは慣れるものなのだ。気付けばモンハンにはまり込んで、夢の中でまでモンスターハンターになっている自分がいて、ネットで攻略法の検索をしたりして、クルペッコのクエストをクリアしたところから、比較的楽に他の大型モンスターを倒せるようになっていた。ジンオウガだって、倒せたのだ。

「これから、つてところだったんですよ。ナルガクルガだって、イビル・ジョーだって倒して、どうせぼっちだからいいや、つて後回しにしてた温泉クエストをこれから頑張つて、ランク上げて、亜種とか倒して、ちょっと怖いけどモンハンのイベントに行つて、狩り友見つけようつて…その狩り友と、いつかアマツマガツチとか一緒に倒したりとかしたいなつて……」

ぐじぐじと鼻をすすりながら私は言う。

「それなのに、それなのにいいいいいい」

皆さん（誰だ）、お気づきだろうか、冒頭の一単語に。

「書類ミスで死んじゃうなんて、ひどいですううつわああああん」

そう、「生前」。

人生の初めから最後まで「ぼっち」なまま、私は短い一生に終止符を打ってしまったのだ。

それも、

「すまんのー。カミサマにもミスはあるんじゃー。ゆるしとくれ」

目の前の、長いおひげを垂らした仙人さんみたいな自称カミサマの書類ミスで。

私の住んでいた地方の人の生死を管理する役職にいたカミサマが間違えて私の書類に「死亡済み」というふざけた判を押してしまったために、私は急死してしまったのだ。自分でも知らない間に。

しかも、死んだ私の魂的な何かをあわてて捕まえて、説明をしてきたカミサマの話で、もう一つの衝撃の新事実を知る。

「まあでも、あんたが「ぼっち」じゃったんは、これまたカミサマの誰かの設定ミスで、文字通り人智を超えた現象じゃったのじゃから、イベントでも友達はできなかったじゃろうなー」

「うええーーーーーん」

私の「ぼっち」人生は、生まれた時から決まっていたらしい。

しかも、カミサマに悪びれた様子が全く見られない。反省は！？

「で、じゃ。本来なら、死んでもうた魂は一度もつと上の部署に持っていて洗濯して、転生させるんじやが、」

自称カミサマは泣いている私を前に普通に話を進める。大丈夫、誰にも慰められないのには慣れている。落ち着いたらそのうち泣き止むから。悲しい映画見ちゃった時に泣いてるのと同じようなのだから、これは。

「あんたを上に乗れて行くと、ミスがばれて左遷されてしまうから、このままワシが転生させてしまおうと思っくんじやー」

「へ、」

に：利益ばっかの取引なんて、ない。

あ、涙止まった。じゃ、なくて、

「どういうことですか」

「じゃからー、記憶持ったまんま転生させると言つとるんじゃ」

ミ、ミスの隠ぺいに巻き込まれる……っ！

「し、知りませんよ！あなたの自業自得です！左遷されればいいじゃないですか！てか、罰を受けるおおおおお！！！」

腹の底から声をだし、相手を呪う心意気で叫ぶ。

「モンハンの世界に転生させてやるぞ？」

ぴくっ

私の耳が動いた気がした。だめよ、自分。誘惑に負けちゃダメ。

「こんなサービス、上はしてくれんぞ？」

ぴくっ

ワシしかやらん、という言葉に肩まで動く。ダメダメ。よく考えなさい。モンハンの世界は魅力的だけど、危ないでしょ。

「しかも、絶対殺されたりしない設定つけてやるぞ？最強だぞ？」

ぴくっぴくっ

ああっ、だから、抑えなさい。ダメだつてば。ダメなの。

なんで？ここまで来たら、何がいけないの？憧れのモンハン世界よ？夢じゃなくなるのよ？最強よ？アオアシラとかウルクススとかナルガクルガとか、もふれちゃうかもよ？？

私の中の正直な部分が囁く。く、私のもふもふ動物好きな部分までつついてくるなんて。でも、竜とかのあの硬い甲羅も実は憧れ…って！ダメよ、こういうカミサマがいたら、ほかにも犠牲者が出るでしょう！理性が叫ぶ。

がんばれ、私の理性！！

「アイルーとメラルーのハーレムもつけよう」

びくんっ！

持ちこたえて！私の理性iiiiiiiiiiiiiiii！！！！

「行きます！転生します！」

ま、無理でした。うん、わかってた。

勢いよく手を上げた私に、カミサマは満足そうに頷いた。

「うむ、じゃ、転生の設定をしてやろう」

「あ、ぼっち設定はちゃんと無くしてくださいよ？」

「もちろんじゃ。しかも、寿命も伸ばしてやろう。いろんな者と関わるがよい」

カミサマが私の頭に手を置く。

「うし、こんなもんかの。ところで、あんたはどのモンスターが一番好きなんじゃ？」

「アオアシラです」

「ふむ」

ウルクススも、ナルガクルガも、リオレイアも、もちろんアイルも大好きだが、一番初めに超絶苦戦した彼らが私は一番気に入ってる。Mじゃないよ？

あの青い色といい、一度倒せるようになると全然怖くない単純さといい、ゲーム内での雑魚さ加減といい、装備のかわいさといい、あのおしりといい、毛皮といい、腕のごつさといい、愛しくてたまらない。全然用のない今でも一日一回は必ずアオアシラの討伐に行っているくらいだ。ちなみに三日に一度はウルクススにも会いにいつてる。可愛いよ。この二頭が足を引きずって逃げるときの後姿と来たら！！もう！！

なんて、内心テンション高く叫んでいると、目の前が真っ白になった。

「じゃ、これから生まれてこい」

少しずつ遠ざかるカミサマの声が聞こえる。

「あ、それと」

ぎりぎり聞こえるか、聞こえないかというくらいの音量で、カミサマは大型樽爆弾G並みの爆弾発言をかます。

「ワシ、魂を人間に転生させれんからのー」

その辺、よろしくのぉー、という言葉を最後に、私の意識が途切れた。

「ふざけるなああああああああああああああ
意識が戻ってすぐに私は叫んだ。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおんっ！」

私が叫ぶと、獣の絶叫が聞こえた。

さん：ある日、くまさんに生まれた。

『がう……』

水面を覗いて、溜息を吐く。

少々（ではないかもしれない）ごつい顔の、赤い瞳がこちらを見返す。

鋭いその目の上から背中にかけて体表を覆うすべすべの青い甲羅。体を覆う短い青と白の艶やかな毛。頭や、甲羅を縁取る白い毛は猫のように滑らか且つふわふわ柔らか。川の淵に踏ん張る腕には鋭い突起のある分厚い甲羅。

牙獣種、アオアシラ。別名、青熊獣、ばーじょん：私。

『アオアシラでも、自分じゃ、愛でれないよう……』

もう一度言おう。青熊獣、ばーじょん：私。

あのカミサマ、最後の最後に暴露しやがった通り、人間に転生はさせてくれなかった。

起きてすぐに絶叫したとき、目に入っただのはびくつと身をすくませる大きな青いくまさん、つまりアオアシラと、その三分の一の大きさもないアオアシラだった。

そして、私もアオアシラだった。

カミサマは、私を、私の一番好きなモンスターに転生させてくれたらしい。

ふざけるな！処分受ける！！！！

しかし、カミサマへの文句を言ったところでそれをカミサマに届ける術を持たない私は早々に状況を受け入れ、アオアシラとしての獣生をスタートさせたのだった。

目を覚ました時に近くにいた大きなアオアシラは私の母で、小さい方は同じ時に生まれた双子の妹だった。私たちは、孤島と思わしき島の、森の中で生まれた。

私と妹は、母に厳しい自然の中で生き抜くための術をたたき込まれた。

食べれるものと、その食料の調達方法を教えられた。また、戦闘時に生き残れるよう、身体能力の向上、戦闘法の習得のため、ある時は大きな川に流され、ある時は谷の上から突き落され、ある時はジャギイの巣に放置され、ある時はボルボロスの前に放り出された。そんな中で、私は、カミサマの設定のおかげだろうか（おかげ、とかあんま好意的な表現は使いたくないけど）、めきめきと、それはもう、母熊が目を見張る速度で成長を遂げた。

半年もたった頃には体は母と同じ大きさになり、川の水面を軽く叩けば何十匹もの魚が舞い上がり、岸に落ちてくるような衝撃を放ち、後ろ脚に少し力を入れて飛べば、30メートルほど離れていたドスジャギイにバックステップをする隙も与えずに距離を詰めれる。ボルボロスの突進だって、全く傷つかないどころか、体をちらりと揺らすこともない。方向は木々を震わせ、ときに岩にひびを入れ、厚みのある鋭い爪の一閃はボルボロスの頭蓋を破壊して撤退させた。

一言で言いあらわすなら、チートである。異常である。あ、二言になった。

だから、そんな私を、母熊が気味悪がったのも仕方ないことなんだろう。

しかし、気味悪がるといっても、母も（多分下位の）ボルボロス
を倒せるくらい強かった（多分上位のアオアシラだった）ので、私
は特に何も言われることなく、二頭と共に生活していた。が、ある
時、三頭で蜂蜜を求めて孤島をうろついていた私たちの前に、それ
まで孤島にはいなかったはずのリオレイアが降りてきて、襲いかか
ってきた。未知の敵を前に、私たち子供をかばおうと進み出た母は、
突如放たれた火炎ブレスで火傷を負い、続けざまのサマーソルトに
尻尾の毒にやられて、倒れた。

苦しそうに震え、しかしなおも立ち上がろうとするが、何度も崩
れ落ちる母、妹は恐怖に固まり、リオレイアは仕上げとばかりに首
をそらせ、口から炎を零した。

火炎ブレスを放つつもりだ。

私はとっさに妹を後方に蹴り飛ばし、飛んで母に近づき、その体
を持ち上げて、妹の方に投げ飛ばした。瞬間、火炎が私を包み込ん
だ。その熱さに、息が止まり、衝撃に私の体は投げ出され、地面に
たたきつけられた。

『があああつ』

地面にたたきつけられた衝撃で、頭が揺れて、一瞬意識が飛びか
けた。しかし、飛ばすことなく、私はすぐに体制を立て直す。火炎

をもらに浴びたはずの私がすぐに立ち直ったことに驚いたのか、リ
オレイアは一瞬動きを止める。それを見て、私は瞬時に飛びかかる
と、分厚い甲羅を纏う腕を勢いよく振り下ろす。

ぐしゃり、と嫌な音がした。

さん：ある日、くまさんに生まれた。（後書き）

あとがきに書きたいこと考えてたら、長くなったので、活動報告に載せました。

よん：なんでもおいしく食べるよ。（前書き）

このお話は、グロ成分高め（当社比）です。
お気をつけて！

あと、青熊獣の生態も虎馬の想像です。
間違っていたら、「主人公はそうなんだな」と生暖かく受け入れて
やってください。

よん：なんでもおいしく食べるよ。

陸の女王との戦いは、あっけなかった。

頭を潰されて、即死した雌火竜の死体を前に、私は黙とうを捧げる。

私の負った被害は少し毛皮が焦げたことくらいだ。炎耐性たっかいと思う。チートだし。

モンスターを殺したのは、これで何回目だったか。初めのころは自分の殺したモンスターの死体を見るたびに、悲しみと、自分への嫌悪感、また、モンスターになってしまったのだ、という実感を持つていたが、最近はそれも薄れてきてしまった。

ここは、ゲームではない。モンスターは体温を持つし、子を産み育てる。このリオレイアも、親を持ち、子を産み、育ててきただろう。やらなくてはやられる、それが自然界の掟であるとはいえ、どこか遣り切れないとは、思うのだ。思うのだが。

そんなことを考えているのに、私は殺したりオレイアの腹を裂き、肉を切り出す。

弱肉強食。強いものが、弱いものを殺すのは、食べるためである。少し意味が違うのはわかってる。

本来、蜂蜜と魚、森に生えるキノコや落ちた木の実だけで生きていけるアオアシラではあるが、私は、自分が殺した相手の少なくとも一部は必ず食べる。なぜかはわからなかったけれど。血が騒ぎ、ひたすらに獲物の肉を求めるのだ。

鋭い歯が肉を引きちぎり、長い舌で流れる血を舐めとる。

心臓を掴み、齧り付く。弾力のある触感に、歓喜する。

狂っている。

どこか冷静な自分がいて、冷たい声が頭に響くが、すぐに癡猛な野生にかき消される。

ひたすらに、先ほどまで黙とうを捧げていた相手の軀に喰いつく。

そして、雌火竜は、私の肉体の一部となる。

やがて、腹が満たされ、私は冷静になる。しかし、取り乱すようなことはない。

そういう部分はいつの間にか麻痺してしまったらしい。私は先ほど放り出した二頭に目を向けた。

『生きてる？』

自分の声が、とても冷たく聞こえた。まだ、どこか狂ったままだからだろうか。

『お、おねえちゃ……』

顎から腹まで、竜の血で真っ赤に染めた姉を見て、ガタガタと震える妹。そんなんで大丈夫なのか、と思うが、まだ子供だ。これでいいのかもしれない。まだまだ母の半分くらいの大きさしかない青熊獣は、とても可愛らしい。が、今は特に何か思うこともなく、ただ、二頭を見る。

その辺に生えていた解毒草でも食んだのか、体の震えのなくなっている母もまた、まるで他人（他熊？）を見るような、何の感情も映らない目で私を見る。

『私、出ていこうか』

何となく、私はここに居ちゃいけない、と言われているような気がして、声を出す。

二頭は、何も答えなかった。

それが、何よりも明確な答えである、と私にはわかった。

そして私は一年も住まなかった孤島に別れを告げ、海を渡った。

こ：寝床が必要です。

思っただけど、流れやら波やらある海を丸一日以上、それも、海中から襲ってくる水棲モンスターの攻撃を避けながら泳ぎ続けれる私って、すごくね？

いや、自分がチートなゲームバランス丸無視な青熊獣って言うのは、分かってはいたのだが。改めて、実感した。

現在、私は渓流と思わしきところに住み始めました。

あ、話飛ばし過ぎ？

* * *

まず、私はどこかの河口にたどりついた。

そこから私は岸に上がり、森に入りながら、川を見失わないよう、上流へと歩き出した。

住処の理想としては、なるべく他のモンスターの近寄らない洞穴で、近くに蜂蜜の採れるような場所があり、少し浅めで魚の狙いやすい川の傍がいい。

この条件は、結構難しいのだが、頑張って探す。

この世界は蜂の巣があちこちにあり、少しずつ蜜が滴っていて、下に蜂蜜溜まりを作るので、蜂蜜は蜜のある花の咲く森ならどこでも手に入る。が、洞穴と川は、条件のいいところは、大抵、すでに別のモンスターの縄張りになっていたりするのだ。

今も、大きな木の幹に刻まれた別のアオアシラの縄張りの目印と

思しき傷が目に入った。……迂回をしよう。なるべく、同族と争うことはしたくない。

次に見つけたのは、傾斜のきつい岩山の横穴だった。少し高いところにある入り口が、目の前に広がる森の高い木々で隠れていて、襲われにくそうだ、と思ったが、少し遠くから様子を見ていると飛竜と思しき影が出てきたので、回れ右。戦ったら勝てるだろうけど、私、別に戦闘狂じゃないし。ていうか、実は昨日食べたリオレイアのせいで若干胃もたれ気味なのだ。なんだろう。こんなの初めてだ。

ビビりじゃないよ！

そんなこんなで、私はうろつくと二日目の太陽が傾き、あたりが朱色になるまで彷徨っていた。

途中、人里があるのを示すような、街道と思わしき場所に行き当たったりして、心臓が縮みそうな思いをした。

やがて、川が細く、細くなった頃、もう一本の流れと別れる場所についた。今度はもう一つの流れに沿って、下流へと降りていくことにする。

ところどころでよさそうな所を見つかるも、やっぱり先住者がいる。

すっかり日も落ちて、月明かりを頼りに歩きながら、もうこれは戦闘して奪うことは避けられないのだろうか、と考えていると、私はいつの間にか洞窟の入り口に立っていた。覗き込むと、電光虫やら光虫が飛んでいて、うっすらと明るい。川のが流れ込んでいるそこに、入ってみる。

下に向かって斜めっている水路を、ぱしゃぱしゃと音を立てながら進むが、何も出てこない。

どんどん下っていくと、急に視界が開けた。

『ぐおん……（わぁ……！）』

思わず唸り声をあげてしまった。暗さに慣れた私の目には、目の前の光景がわずかな光る虫たちの光だけでもはつきりと映っていた。

段々になっている平らな岩肌（鍾乳石のテーブルってやつかしら）。高い天井には立派な鍾乳石のつらら。

流れ込んだ川はうねりながら縦横無尽に空間内を走り、やがて更に落ちていくのだろう、テーブル状の石の間に吸い込まれていく。光の少ない環境だからだろうか、網目状にゆるゆると流れる水の中を泳ぐ結構大きめの魚の目は、どうやら退化しているようだ。

静かで、まるで時間が止まったかのような、なんだか神聖な雰囲気すら感じるような空間だった。

モンスターの気配はない。こういう、洞窟の中にはブナハブラやオルタロスがいることも多いが、その気配すらない。

『蜂蜜ないけど……とりあえず今夜はここで寝よう』

私は三匹魚を食べて、少し斜めった上に上の段がせり出っていて、影になっている部分にもぐりこんで、眠った。

次の日、広い空間を探検していて、上の方に斜め上に向いた横穴を見つけ、そこを通り、私は上に上がった。

そこに、下にあった空間に似た、広い空間を見つける。しかし、そこにはブナハブラが飛んでいて、段々を昇っていくと、明らかに竜種の巣と思われる、食べかすや糞、骨に卵の殻の散らかった空間があり、そこには二つの、出口と思しき通路があった。

私はモンスターが巣にいないことにほっとしながら、水の落ちるような音の聞こえるほうへと足を進める。

滝があった。

こちら側には流れ込んでいないから、裏側だろう。

滝の裏側に入り口のある洞窟。何かデジャヴを感じながら、私は滝を潜り抜ける。

（やっぱり……）

目の前の光景に、心の中で頷く。実際には立ち上がり、軽く吠えたのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8355x/>

涇流の蒼き..... くまさん

2011年11月11日18時13分発行